

くまの 熊野市



特産物 熊野市

なちぐろいし 那智黒石

.....

那智黒石は熊野市神川町で採掘されています。熊野三山の一つ那智大社に参拝した人たちのみやげとして、全国に広がったことから那智黒石という名称がつけられるようになりました。

那智黒石は黒色珪質頁岩の光沢ある黒い石で、熊野市の神川・育生地区など北山川沿いの地域に鉱脈があり、昔はたくさん採掘されていました。高度経済成長期には売り上げも大きく伸びましたが、1990年代前半に起きたバブル崩壊後は生産量も落ち、現在の主な生産業者は2業者で、採掘から製品に至るまで一貫した作業を行っています。製品には干支の置物・花瓶・硯石等があります。基石の黒い石も那智黒石からできており、神川町で生産し宮崎県の日向に送り製品化されます。基石の白い石は、メキシコ等から輸入した貝殻を主に使用して製品にします。

なお、人の力量や、ものごとの価値を判断するものとなるものという意味で「試金石」という言葉がありますが、試金石とは、本来、金の品位や真贋を試すために条痕板にこすりつけて純度を調べるときに使う石のことで、那智黒石が使用されています。



那智黒石の里

▪ 頁岩について調べてみましょう。

史跡

熊野市

あかぎじょう たびら こうげいじょうあと
赤木城・田平子峠刑場跡

三重県と和歌山県にまたがる熊野川(全長183km)の上流には、北山川という支流が流れ、川沿い一帯を北山と称しています。山が迫り、平地が少ないため農業だけで生計を立てるのは難しい地域ですが、木材供給地としては重要な地域で、この地域の木材は戦国時代から江戸時代にかけての相次ぐ築城や寺院の造営などに大いに利用されていました。

この地域には、太閤検地に反対した「北山一揆」と呼ばれる農民一揆があったとされていますが、最近の研究によると、この一揆は1586(天正14)年に蜂起し、同年中に豊臣秀長に平定された熊野牢人衆一揆と、1614(慶長19)年に領主浅野氏の支配に反発して大阪冬の陣で手薄になった新宮城を攻撃した一揆であったことが判明しています。

このうち赤木城は天正の一揆に、田平子峠刑場跡は慶長の一揆に関係したものであったとされています。赤木城は、小さいながらも当地の城のなかでは珍しく石垣で固められた城で、出入り口の構造などに戦国期の特徴がよく表れています。



田平子峠刑場跡

- 身近な地域で起こった一揆を調べてみましょう。

歴史

熊野市

きしゅうこうざん
紀州鉦山

紀州鉦山の古い坑道跡の側壁には、1337(延元2)年という文字が記されており、少なくとも南北朝時代には現在の熊野市紀和町で銅が採掘されていたと推測されています。江戸時代になり、熊野床とよばれる精錬技術が開発され、生産規模も拡大することで紀州鉦山は大いに繁栄しました。

近代鉦山としては、1934(昭和9)年に石原産業紀州鉦山が紀和町に誕生し、本格的な銅の採掘が始まりました。積極的に新しい技術を取り入れ生産規模を拡大し、日本で最初に2000tの精錬に成功し、最盛期には3000tの生産量を誇りました。坑道の長さは約320km、最深部約420mに達する国内有数の銅山として、日本の産業発展に大いに貢献しました。

戦後も町は鉦山を中心として発展を続け、最盛期には人口8000人を有し、映画館等の娯楽施設もつくられ大いに繁栄していましたが、石油危機以後の円高により、1978(昭和53)年、紀州鉦山は閉山に追い込まれ、44年間にわたる鉦山の歴史に幕を下ろしました。今では鉦山跡だけが残り、当時の繁栄の様子を偲ぶことができます。



紀州鉦山の様子(湯ノ口温泉)(熊野市教育委員会提供)

【→P110*26】

- 現在、日本で採掘されている鉦産物とその産地についてまとめてみましょう。

祭り

熊野市

くまのおおはなび
熊野大花火

熊野大花火は江戸時代の中期に始まり、およそ300年の歴史を誇る東紀州地方最大の夏のイベントとして定着しています。その起源は、木本町の初盆の家々が先祖の霊をなぐさめるために始めた行事でした。極楽寺で精霊を流す時、簡単な花火を打ち上げ、その火の粉で灯籠を焼いたのが始まりでした。時代と共に規模が拡大し、現在行われているものに変化してきましたが、灯籠焼きや追善供養の打ち上げ花火がプログラムに組み込まれていることから、仏事とのかわりは深いものであると考えられています。

現在の熊野大花火大会では、岩場や洞窟を利用し、クレーンで引き上げた90kgの大玉を自爆させたり、様々な仕掛花火を組み合わせたりする鬼ヶ城大仕掛や、重さ250kgもある三尺玉を海上に浮かべて爆発させる海上自爆など、大がかりな花火が有名になり、17万人前後の観客が毎年訪れるようになってきました。

このイベントを一過性のものではなく、地域再生の一つとして活用し、地域の活性化につながるものになるようにしていきたいものです。



熊野大花火

- 各地で開催されている花火大会について、その歴史や関連行事などを調べてみましょう。

COLUMN

コラム

三重ブランド

三重ブランド認定制度は、特に優れた県産品及びその生産者を三重ブランドとして認定し、情報発信することにより、三重県の知名度を向上させ、観光及び物産の振興並びに農林水産業等の生産者の意欲を高め、地域経済の活性化を図ることを目的に、平成13年度に創設されました。

「自然を生かす技術（人と自然の力）」をコアコンセプトとして位置づけ、三重ブランドのアイデンティティを明確にするため、①コンセプト ②独自性・主体性 ③信頼性 ④市場性 ⑤将来性の5項目について認定規準を定めており、認定委員会の審議を経て知事が認定します。

「自然を生かす技術」とは、自然や伝統を守り育む意思や自然との共生、共存を図りながら自然の力を引き出す知恵が脈づいているということの意味しています。

平成21年度までに、11品目「真珠」「松阪牛」「伊勢えび」「的矢かき」「あわび」「伊勢茶」「ひじき」「ひのき」「南紀みかん」「あのりふぐ」「伊賀焼」と、33事業者が認定されています。

【→P15、40、45、50、65、67、70、73、79、90】